自己点検・評価報告書２０２１・２０２２全学報告会における外部講評まとめ

【工学部に関する講評内容】
講評者：東海大学　工学部　教授　前田秀一　氏

◆東京工芸大学が理念に掲げている「テクノロジーとアートの融合」は写真を基礎とした歴史に裏打ちされた他に類を見ない独自性があり強みとなる。

◆「色の国際科学芸術研究センター」は世界的にも珍しく、東京工芸大学の特徴をよく表している大変貴重なセンターと考えている。色に関するテーマは、グローバル化社会において、国際化の足掛かり、また、産学官連携にもつながると感じた。

◆学生ファーストの精神は評価できる。すべてにおいて学生ファーストを考えて実施されており、特に評価については期末テストのみではなく、小テストなどを活用して総合的に評価しているところが良い。

◆学生ファーストの視点および色彩に力を入れている点から、色覚異常を持つ学生への対応は本学ならではの課題と考える。色覚異常の学生の対応は現状では把握できない状況であるが、色の研究を通して、こういった学生への対応に、本学の強みを持たせることができるのではないか。

【芸術学部に関する講評内容】
講評者：中央大学　国際情報学部　教授　村田雅之　氏

◆「工芸融合」の視点は非常に重要である。工学部と芸術学部の特色を活かした「色の国際科学芸術研究センター」は、貴学のブランド力にとって強力であり、独自性が高く魅力的な存在である。

◆2021 年度に「学修サポートセンター」、2022 年度に「メディア芸術研究センター」が立ち上げられ、2019 年度からは「科研費申請助成費」が、2022 年度からは「特別研修制度」が設けられている。多様な領域で新たな試みが積み重ねられていることは、大変に評価できる。

◆キャンパスが分離していることで、学外から見ると別の大学のように見える。「工芸融合科目」は存在するが、自校教育としてのボリュームは少ない。オンライン技術を活用することで他学部履修にさらに制度的に取組み、現状以上に「芸術学部の授業が受けられる工学部」や「工学部の授業が受けられる芸術学部」の色合いを強めることなどの構想も必要かもしれない。

◆コロナ禍以降、図書館利用者数が減少しており、回復への対策が必要である。繰り返し対処策を展開することを提案する。

◆東京工芸大学では「コウゲイ.net」で、深いレベルの個人情報を参照可能である。個人情報の取扱いを検討し、閲覧権限の範囲を見直す余地がある。

◆指導と学内運営に真面目に打ち込んでいる教員が、研究活動に積極的になるには厚い障壁が存在する。もっと研究に時間をさけるように整理が必要である。科研費申請助成費等の「プッシュ要因」の整備だけでなく、研究への積極性を妨げる「プル要因」の精査も必要ではないか。まずは丁寧に情報収集をすることから始めることを提案する。

◆自己点検・評価報告書には、「…している。」というような記述が多くみられる。「量的データ」の記述が不十分にならざるを得ない事情は理解できるが、一方で、数値に基づく説得力のある記述は必要である。今後は、「数値データの精査を主目的とし PDCA の C に特化した会議体」などによって、内部質保証の「実質化」に向けて、検討を深めることを提案する。

以上